

# 熊本方言における感情を

## シヨル形とシトル形

— 覚書として — \*

島山 真一

### 一 はじめに

本論文は、人称制限が観察される感情を表現する動詞に注目し、そのふるまいを高知方言および熊本方言で検討したい。人称制限とは、小説の地の文のような「かたり」の文脈ではなく、日常会話のように、発話行為の場・時点・参加者と直接的な関係にとりむすぶ「はなしあい」の文脈において、主語の人称が一人称に限られる現象であり（金水 1989; 工藤 1995; 南 2002）、(1)、(2)に例示されるように、日本語において、感情・感覚 を表現する形容詞（感情形容詞）の言いきりの形に典型的に見られるものである。

(1) a. 私、うれしい／うれしかった。<sup>\*i</sup>

b. 彼が、<sup>\*</sup>うれしい／うれしかった。<sup>\*2</sup>

(2) a. 私、頭一痛い／痛かった<sup>1</sup>。

b. 彼が、頭一痛い／痛かった<sup>1</sup>。

(1)や(2)に例示されるような人称制限は、以下の例が示すように、ラシイ・ヨウダといったモダリティ要素を付加することによって解除可能である（寺村 1984; 金水 1989; 仁田 1991）。

(3) a. 彼が、<sup>\*</sup>うれしいラシイ／うれしかったヨウダ<sup>1</sup>よ。

b. 彼が、<sup>\*</sup>頭痛いラシイ／痛かったヨウダ<sup>1</sup>よ。

このように、日本語においては、感情や感覚のよ<sup>1</sup>うな直接知覚・認識することができない状況を記述する場合、そのことを示すモダリティ要素が文末に配置されねばならない（益岡 1997）。

人称制限は、感情形容詞にのみ見られる現象ではなく、一部の感情を表現する動詞のスル形・シタ形でも観察される（寺村 1982; 工藤 1995; 定延 2006）。

例として、次の「イライラする」を述語とする文を見よう。

ただし、以下の文における主語（感情主）はそれぞれ「俺」、「田中君」とする。

- (4) a. あー、俺、イライラする／イライラした\*。  
b. あー、田中君が、イライラする／イライラした\*。

(4a) では、主語が一人称であり正文となっているが、(4b) では、主語が三人称で非文となっており、感情形容詞と同様に言い切りの形において人称制限が観察される\*。

本論文では、感情を表現する動詞の中で、(??)に見られるような例外はあるものの、スル形・シタ形において基本的に人称制限が観察される動詞を「感情表出動詞」と呼ぶ\*。感情表出動詞には、次のようなものが含まれる。

- (5) イライラする、困る、あきれ、むかつく、照れる、しびれる、悩む、めげる、落ち着く、迷う、どきどきする、くらくらする、むしゃくしゃする、わくわくする、助かる、まいる、弱るなど

本論文で分析のターゲットとなる感情表出動詞は、共通語においてアスペクト形式と人称制限が連動するという点で多くの研究者の注目を集めてきた（高橋 1985, 2003; 堀川 1991; 工藤 1995; 山岡 2000）。すなわち、感情表出動詞においては、スル形・シタ形において観察された人称制限が、シテイル（シテイタ）形において解除され、人称制限とアスペクト形式が連動する。(6)と(7)は、「イライラする」、「困る」を用いて、このことを例示したものである。

- (6) a. 高橋さんが、イライラする／した\*。  
b. 高橋さんが、イライラして／してた\*。  
(7) a. 高橋さんが、困ります\*。  
b. 高橋さんが、困ってます。

では、この種の人称制限とアスペクト形式の連動現象は、共通語とは異なったアスペクト体系ではどのようなふるまいを見せるのだろうか。次節以降、この点を検討していく。

## 二 熊本方言のアスペクト体系

熊本方言は、多くの西日本方言と同様に、完成相（ス

ル形、シタ形)、不完成相(シヨル形、シヨッタ形)、パーフェクト相(シトル形、シトッタ形)が対立する三項対立型のアスペクト体系をなし、完成相に関しては、共通語と同じく、事態を外側から眺めた「ひとまとまり性」を表現するが、不完成相に関しては、限界未達成性を、パーフェクト性に関しては限界達成性を表現する(島本智美 2009)。以下の例は、動作動詞「走る」と変化動詞「割れる」におけるシヨル形とシトル形である。

(8) a. 見て、宏が走りヨル。(限界未達成性(動作の進行))

b. ありや、宏が走ットル(限界達成性(パーフェクト))

(9) a. 見て、窓ガラスが割れヨル(限界未達成性(変化の進行))

b. 見て、窓ガラスが割れトル(限界達成性(結果状態))

(10) a. 宏が、プラモデルを壊しヨル(限界未達成性(動作の進行))

b. 宏が、プラモデルを壊しトル(限界達成性(客

#### 体変化結果残存)

(8)、(9)が例示するように、熊本方言は共通語においてシテイル形式が担う意味である「動作の進行」と「結果状態」・「パーフェクト」を、シユウ形とシチュウ形に分化させて表現する言語と言えらる。

熊本方言は、他の西日本諸方言と同様に、シヨル形とシトル形の対立が動作動詞では中和されるケースがある。例えば、次の例では、シヨル形とシトル形が揃って、「歌う」という動作の進行を表現している。

(11) a. 宏なら、今、カラオケボックスで歌いヨルよ。

b. 宏なら、今、カラオケボックスで歌ットルよ。

このように、熊本方言は共通語と大きく異なったアスペクト体系を持つのだが、感情表出動詞に関しては、どのようなふるまいを見せるのだろうか。次節で、この点を検討する。

#### 三 熊本方言に見られる感情表出動詞のふる

まい

感情表出動詞は、熊本方言において非常に興味深

いふるまいを見せる。共通語においては、スル形をシテイル形に変換することでスル形で観察される人称制限が解除されるのだが、熊本方言においては、そもそもシヨル形が多くの感情表出動詞で不可能である。次のコントラストを見て欲しい。<sup>\*</sup>

(12) a. ?うーん、困りヨル。

b. うーん、困つトル。

(13) a. あー、イライラしヨル。<sup>\*</sup>

b. あー、イライラしトル。

このように、感情表出動詞に関しては、シヨル形とシトル形の文法性に関するコントラストが観察され、シトル形においてのみ人称制限解除が観察されるのである。

このコントラストは、何に起因するものだろうか。この点を考える際、熊本方言のシヨル形に「動作の直前」の用法がないことに注目するべきと思われる。

熊本方言と同じ西日本諸方言に含まれる宇和島方言のシヨル形には、動作の直前の用法が存在する。例えば、次の文は「ネコが徐々に魚に近づきつつある様」を記述するために使用可能である（工藤

1983）。

(14) あ、ネコが魚、食べよる。

この「動作の直前」の用法を熊本方言は持っていない（島本智美 2009）。例えば、(14)は熊本方言の場合、「猫が魚を食べている最中」という動作の進行の読みしか持たず、宇和島方言で観察される「動作の直前」の読みを持っていない。

熊本方言において、感情表出動詞のシヨル形が不可能であること、そしてシヨル形に「動作の直前」の読みがないことは、熊本方言のシヨル形にウチナーヤマトウグチのシヨル形や奄美方言のシテアル形と同様に、何らかのメノマエ性がつきまわっていると考えられること、説明可能である（まつもと 1996; 工藤 2007）。メノマエ性とは、「さまざまですがたで、ココに、イマ、アクチュアルにあらわれているデキゴトと、それをハナシテが目撃していることを、ある文法的なかたちに表現してつたえているとき、そこにいいあらわされている意味的な内容」のことであり、話し手が現場で目の前にある事態を描写していることを示す文法マーカーである（まつもと 1996;

p.77)。

まさに、このメノマエ性が熊本方言のシヨル形につきまとうがゆえに、感情表出動詞において不可能となるのではないかと考えられる。すなわち、感情は、他者から不可視であるが故に、メノマエ性がつきまとう熊本方言のシヨル形を持つことができないのである。同様に、熊本方言のシヨル形が「動作の直前」の読みを持たないことも、ここから説明可能である。すなわち、「動作の直前」の局面では、「動作」そのものが不可視であるが故に、メノマエ性がつきまとう熊本方言のシヨル形は、それを表現できないと考えられる。

このように、熊本方言のシヨル形は何らかの意味でメノマエ性を持つと考えられる。しかし、この一般化を疑わせるデータも存在する。例えば、「ドキドキする」のような感覚を表現する動詞は、以下の例が示すようにシヨル形が可能である。

(15) あー、ドキドキシヨルよ。

このようなデータに関しては、今後さらに分析が必要である。

#### 四 おわりに

感情表出動詞の人称制限という観点から、熊本方言のシヨル形とシトル形の分析を行った。基本的には、熊本方言のシヨル形にメノマエ性を認めるべきと考えるが、いくつかの反例も存在するため、今後、さらに研究をすすめていきたい。

\* 本論文は、畠山(2011)の一部が使用されている。

\*1 東(1999)が述べるように、人称制限が観察される言いまわりの形の文では、一人称主語は省略されるのが普通であり、統語的に実現されるのであれば、無助詞格で表現されるのが普通である。

\*2 この場合、無助詞格にしても文法性は変化しないことから、ガ格は判定に影響しない。

\*3 ただし、スル形が確定的未来を表現する場合は、この限りでない。

\*4 山岡(2000)も「感情表出動詞」という術語を使用しているが、彼の言う「感情表出動詞」には、思考動詞や感覚動詞が含まれ、本稿における「感情表出動詞」よりも広いカテゴリーとなっている。

また、本稿では「困る」を感情表出動詞としているが、山岡(2000)は、この動詞を、感情変化動詞という別のカテゴリに入れていいる。

\*5 文法性判断は、四名の二十一歳から二十二歳の女性に対する調査によるものである。

#### 参考文献

- 金水敏(1989)。「報告」についての覚書」仁田義雄、益岡隆志(編),『日本語のモダリティ』, pp. 121-129. くろしお出版
- 工藤真由美(1983)。「宇和島方言のマスベクト(1)」『国文学解釈と観賞』, 48(6), pp.101-119.
- 工藤真由美(1995)。「アスペクト・テンス体系とテキスト」『ひつじ書房』
- 工藤真由美(2007)。「複数の日本語という視点から捉えるアスペクト」『言語』, 36(9), 32-39.
- 定延利之(2006)。「心内情報・帰属と管理」現代日本語共通語「つづる」のエイ・ディンシャルな性質について」
- 中川正之・定延利之(編),『言語に現れる「世間」と「世界」』,『言語対照(外から見る日本語)』, 2巻, pp. 167-192. くろしお出版
- 高橋太郎(1985)。「現代日本語動詞のアスペクトとテン」秀英出版
- 高橋太郎(2003)。「動詞九章」くろしお出版
- 寺村秀夫(1982)。「日本語のシンタクスと意味」くろしお出版
- 寺村秀夫(1984)。「日本語のシンタクスと意味」くろしお出版
- 島本智美(2009)。「熊本方言教材開発のための『トル』と『トル』の考察―若者の使用実態を中心に―」  
<http://www.isc.kagoshima-u.ac.jp/hooogen/pdf/07yorutoru.pdf> よりダウンロード可能である。
- 仁田義雄(1991)。「日本語のモダリティと人称」ひつじ書房
- 畠山真一(2011)。「感情表出動詞の局面構造と人称制限」『筑紫日本語研究2010』, pp. 11-20.
- 東弘子(1999)。「感情表出文」『自然言語処理』, 6(4), pp.45-65.
- 堀川智也(1991)。「心理動詞のアスペクト」『言語文化部紀要』, 21, pp.187-202. 北海道大学。

- 益岡隆志(1997).「表現の主観性」田窪行則(編).『視点と言語行動』. pp. 1-11. くろしお出版.
- まじもとひろたけ(1996).「奄美方言のメノマエ性」龍郷町瀬留」『日本語文法の諸問題』高橋太郎先生古希記念論文集』. pp. 77-105. くろしお.
- 南不二男(2002).「談話の性格と人称制限」『近代語研究』11巻. pp. 459-471. 武蔵野書院.
- 山岡政紀(2000).『日本語の述語と文機能』. くろしお出版.